

ジャラパゴス、あるいは孤立した楽園？

——わたしのみた日文研と日本

尹 海東

1  
二〇〇九年四月一日、わたしの日文研生活がはじまった。その後、一年間二人用の夫婦寮に滞留しながらとり組んだわたしの研究テーマは「国家としての朝鮮総督府」である。一般の人びとには少し生硬に思われるかも知れないが、このテーマは朝鮮総督府を「近代国家」、ないしは「植民国家 (Colonial State)」として規定しえるかどうかを検討しようとする意図をもつものであった。朝鮮総督府を植民国家として規定することは、ある側面からすれば、近代日本の国家と社会の性格を理解するために非常に重要な意味をもつことができる。では、ある側面とはなにであろうか？

わたしは今「わたしのみた日文研と日本」という主題の下で文章を綴りだしている。したがって、朝鮮総督府における国家論的性格と本稿の主題がいかなる関連を有しているのかを、もう少し具体的に説明しなければならぬ。その間、朝鮮総督府はそれに帯びられている抑圧性が研究者たちによって過度に前提とされてきたため、有意義なる研究テーマとしてとり扱われることはなかった。しかしながら、植民地期における朝鮮の「国家と社会」の性格を掘りさげて理解するためには、まず「統治権力」の性格を考慮してみる必要がある。しかも最近の

「ポストコロニアリズム」の文脈から提起された「植民地近代 Colonial Modern」という問題意識に照らしだしてみても、これは決して軽々と扱うべき主題ではなからう。

わたしの研究テーマに関する話しが長引いているが、もう少し付きあって頂きたい。朝鮮総督府は朝鮮における行政権・立法権・司法権、そして軍隊を使用する権利までをももちつつ、日本の天皇に直隸するよう規定されていた総督を中心として、強力たる力と自律性を有する権力であった。むろん、主権という側面からみれば欠格とならざるをえないが、国家の能力および自律性という基準からみれば、朝鮮総督府は「植民国家」と呼ばれて遜色のない権力であった。

要するに、わたしは日文研に滞留する間に、以下のような事実を明るみにだそうとしたのである。つまり「植民国家である朝鮮総督府は、日本の天皇と議会に『隷属』されてはいたものの、強力な力と自律性をもつ独自の植民国家」であったことを。これこそがわたしの研究における目標であった。朝鮮総督府という植民権力は、本国の行政府および議会、さらには市民社会とも深いかわりをもっていた。よって、近代的な植民統治を研究することは、本国社会と植民地の間における相互作用を明らかにすることから出発しなければならない。かかる問題意識を含みこむ歴史学の方法論というのが、まさに「帝国史」ではなからうか？冒頭において、わたしの研究テーマが近代日本における国家と社会の性格を理解することに足しになりうると述べたのは、まさにこのような理由があったからである。

要領をえない文章で遠回りをしてしまったが、この研究は韓国と日本における歴史や社会を、僅かではあるが「普遍主義」的に解釈することに役立つであろうと、わたしは内心期待していた。それが左翼であろうが右翼であろうが、第二次世界大戦以後における韓国と日本の歴

史研究は、特殊性を強調する一国史的な偏向から脱することにほとんど失敗してきた。植民地に介され複雑に絡まっている韓国と日本の歴史研究は、これから偏屈な特殊主義の視座から脱皮し、新たな「普遍の世界」に赴くべきである。わたしにとって日文研は、そのような研究を遂行する使命を帯びている研究機関であるかのようにみえた。既往の研究においてそれができなかったのなら、果敢に既往の枠組みを脱ぎ捨てるべきだと思っていた。

## II

あまりにも自由で余裕のある生活が楽しめた日文研での一年間の滞留は、わたしには恩恵深い「恵みの時間」となった。研究所は外国人研究者たちにも快適な住居の空間や広くて静かな研究室、そして多くの蔵書を保有する図書館の利用を提供してくれた。与えられた環境に相應しい水準の高い研究を遂行したとは「決して」いえないが、この恵まれた時空間で過ごした経験が未来のわたしをさらに豊かにしてくれるということについては、今でもなお少しの疑念すら感じていない。

とりわけ、わたしに鮮やかな記憶として残っているのは、三人の研究者との特別な出会いである。一人は日文研で、もう一人は京都の市内で、そして最後の一人は日文研の図書館で「本をつうじて」出会った。まず一人目は、日本宗教学を専門とする日文研の准教授、磯前順一である。わたしは折よく立命館大学で行われていた磯前先生の大学院授業に参加することができたが、そこで多くのものを学び、また共振しあうことができた。二人目は、立命館大学の名誉教授である西川長夫だ。西川先生の「国民国家論」に関する著作はすでに韓国でも広く知られているが、日本滞留中にかれの理論をさらに深く理解することができるようになった。最後に

図書館で出会った人は、沖繩に滞留しつつ平和運動を行っているアメリカ人、ダグラス・ラムス Douglas Lummis である。かれの本をとおして日本の「戦争と平和」について、もっと多くのものを学ぶことができた。この三人は、日本の歴史と社会を特殊たるものとして解釈しようとしなかった。そして、韓国の植民地経験についても決して開かれた姿勢を失うことはなかった。かれらとの出会いは、わたしの日文研に対する記憶をいつまでも輝かせてくれるであろう。

他方で日本での経験が積み重なっていくことにつれて、日文研に対するわたしの印象には、あるかすかな影が落とされていくようになった。その影は恵みの時空間のなかで行われていた幸せな交流が投げかける強烈さとコントラストをなしながら、さらに濃くなっていった。わたしにとって日文研は次第に、俗なることばでいえば「俗世とかけ離れた」世界として見え始めたのだ。都心から遠く離れた山の中腹に「寺院のごとき」ひっそりと位置している空間的な環境をいうのではない。むしろ、日文研が進めている「深奥な」人文学研究に対する印象をいわずとするのである。日文研では哲学・文学・美学・文明交流史・生態学・医学史・経済史・社会史・音楽史・宗教史等々の分野において深い理解をえようとする研究が進められている。一見すると、怪異で秘密めいた日本の伝統文化を対象としている研究だからというわけではない。日本特有の奇異なる世界、特殊性の世界のみを扱っているのではないか、という疑問を拭い去りきれないのである。一日も早く「俗世」、いい換えれば「普遍性の世界」に戻ってくることをただ願うのみである。あるいは、日文研に対する自分の印象が間違っていただけであろうと、これから私が思い直すようであってくれればと願っている。

ずいぶん前からわたしは「植民地認識のグレーゾーン」という概念を用いて、韓国近代史の

研究を一国的で民族主義的な眼差しから脱却させることに尽力してきた。韓国における植民地時期に関する認識の基本的な枠が「民族主義」や「近代化」という二つの概念にもとづいている点と、それゆえにこれらの概念ではとらえ損なってしまう認識論的な「グレイゾーン」が存在することを指摘したのである。別言すれば、支配と抵抗という二項対立的な図式では把握されない植民地認識のグレイゾーン、それはまさに「抵抗と協力が交錯する地点」、もしくは「動揺する地点」でもあったということになる。

植民地被支配者の日常が「動揺」そのものであったとするならば、逆に支配する者の態度や心理は果たしていかなるものであったろうか？抵抗と協力の間で動揺する被支配者たちは、支配する者たちを映す鏡である。わたしは日本の人文学、そして近代史研究とは、まさにかような問題を解釈するものであるべきだと思っている。しかし「俗世から離れた」日文研、また日本の人文学では、その役割を引き受けることはできないであろう。

### III

京都や奈良、それから大阪と神戸を周辺にもつ日文研での生活は、わたしをして旅行に対する期待感を呼び起こさせた。片手間に、または韓国から訪問客がくる度に、わたしは京都周辺のいろいろなところを旅行しようと努力した。ところが、京都と奈良、そしてその周辺における古蹟や遺跡は、まるで「空の星」のごとく多かったので、わたしは「空の星を数えることは決してできない」という挫折感を早々と感じざるをえなかった。

もちろん京都で感じたこの「楽しい挫折感」のためではないが、わたしは一方で日文研に滞留する期間中に日本におけるいくつかの特定の地域を旅行する計画を立てていた。それには二

つの意味合いがあったが、旧藩閥の本拠地と原子爆弾の被爆地を訪れてみるものがそれであった。この計画は、日本近代化の「始まりと終わり」への好奇心によるものであった。明治維新の主役となった二つの藩閥、すなわち長州藩の本拠地であった萩、薩摩藩の本拠地であった鹿児島、そして二つの被爆地、すなわち広島と長崎を、わたしの長距離旅行計画の目標にしたのである。わたしは日本に滞留していた一年の間、萩や広島、そして長崎を旅行することができた。なお、帰国した翌年（二〇一一年）の一月に鹿児島島の遺跡を踏査し、当初予定していた計画を達成した。

今は閑寂な田舎になっている萩と鹿児島からは、なるほど明治維新を主導した旧武士たちの壮大なる気運を、ぼんやりとしているとはいえ、いまだに感じとれるような気がした。だが、どこにおいても、かれらが導いた「暴走機関車」、とりもなおさず疾風怒濤の近代化が招来した戦争と植民地支配に対する反省を感じとることはできなかった。かような惜しさは、広島や長崎においても同様であった。被爆の経験が侵略戦争に対する反省や責任につながっていくとはなく、その莫大なる犠牲が原爆への根源的な反対として結ばれることもなかった。単なるおぼろげな「哀悼やメランコリー」だけは存在したが、それは方向を見失った無責任にすぎないものであった。

二〇〇七年の秋、韓国で日本の平和憲法を守る会、いわば「韓国九条会」が創立された。「韓国九条会創立準備大会」において、わたしは「日本の平和憲法を守る会の意味」という題で基調講演を行った。その内容は大体つぎの三つの主張から構成されている。まず、日本の平和憲法には、日本の侵略と植民支配によって被害を受けたアジア太平洋地域における諸々の国家の平和への念願が反映されている。また日本の平和憲法は東アジア、さらには世界の平和

を希求する民衆たちの念願が反映されている、平和のための権利章典であり国家間の契約であるのだ。二つ目に、国家の対外暴力を禁ずる日本の平和憲法は近代国民国家の権能を否定するものであり、その意味で近代を乗り越えた脱近代的な憲法であるといえる。最後には、平和憲法を守る運動は、平和を根本的な価値としてみなす東アジア市民社会の形成をつうじて、「平和の東アジア共同体」を構想する東アジア連帯運動へと高められていくべきである。

要するに、わたしにとって日本の平和憲法を守るということは、日本の戦争責任と植民地支配の責任を問うことであり、これをもって自国の平和や世界の平和を鼓吹することでもあった。よって上記の四つの場所を見回すことは、わたしにとって日本平和憲法の起源を探ることとなった。日本の特殊性を探しただすのではなく、日本が世界に寄与しうる普遍性の手がかりを模索することになったのだ。萩と鹿児島、広島と長崎が、わたしにとっては日本が普遍主義の世界に足を踏み入れるための大きな扉であるかのように思われた。

鹿児島を訪問してからもなく二〇一一年三月一日に日本で起こった事件は、全世界人を驚愕させた。物々しい規模の津波は大自然のむら気だとしても、福島における原子力発電所の爆発事故はどのように理解すべきなのか？前代未聞の原子爆弾の被爆による大きな傷を受けた日本で、なぜ再びこのような事故が起こったのか？「軍事的な核」ではない「平和的な核」なら大丈夫だという思考自体に、深刻な問題が内包されていたのではなからうか？

『日本人の犠牲』は『軍事的な核』によるものであったが、近代化のための速度戦には『平和的な核』が必要になることもある。しかもそれはエコでコストも安いエネルギーだろう。このような原子力の平和的利用に関する安易なる思考は、一体なにに由来するものなのだろうか。わたしの考えは、次第に自分の広島と長崎への旅行の記憶に遡っていった。広島と長崎に

ついで日本人たちの記憶は、本当に、自国民たちの犠牲に対する哀悼のみで埋めあわされるべきであったのか。むしろ、その犠牲は侵略戦争によって誘発されたのであり、その侵略戦争の背景には暴走する日本の近代化があったのではないか。そうだとするならば、日本人たちの被爆が自国中心の安易な近代化がもたらしたものであるならば、自国民たちの犠牲に対する反省は「平和的な核」の利用というような暴走する近代化を肯定する姿勢そのものに関する省察へと開かれていくべきであったのだ！

二〇一二年、韓国では「脱核運動」を前面に掲げるみどり党が創立した。わたしももちろん喜んでみどり党の党員になった。だが、韓国の東南海岸と中国の山東半島には十数機の原子力発電所が並んでいるだけではなく、さらに増えていく予定である。もし、もう一度、いずれかの原子力発電所から事故が起きてしまえば、それは東アジア全域に破局的な影響をもたらすものにならざるをえない。脱核運動が一国的な次元を乗り越える地域的な連帯運動になり、またグローバルな生態・平和運動にまでつながっていかなければならないのはこのためである。これと同様に、日本の広島と長崎は、同時に「全世界人の広島と長崎」でもあるのだ。

#### IV

ガラパゴス Galapagos を知っているのだろうか？南アメリカの東太平洋にあるエクアドル領の諸島として、チャールズ・ダーウィンの進化論研究に大きな影響を与えた島としてよく知られている。では、「ジャラパゴス Jalapagos」は、これはジャパンとガラパゴスを掛けあわせた造語として、日本が南米の離れ島のように自ら孤立して、世界の流れから背けていることを指摘する用語である。たしかに、日本の政治は逆走する自動車のごとき後退りしているようで、



経済もまたバブルの崩壊以来、生気をとり戻すことができず、長い間にわたって沈滞をくりかえしている。このような現象は日本の孤立主義と閉鎖主義から由来するという指摘は、ある程度の妥当性をもっている。さりとて、これからも相変わらず日本の特殊性を強調し、日本だけの閉鎖的な世界のなかに閉じこもっていいはならないであろう。

東アジアの周辺国では、日本政治の右傾化に対する危機感が高い。アメリカもまた日本政治の右傾化が巻き起こすかも知れない東アジアでの政治的葛藤を警戒している。日本の経済的沈滞は構造的危機として転換しつつあるかのようにみえるが、これはまた周辺国の経済にも危機感を高めている。このような日本の政治経済的な危機の状況は、ただ一国的な危機に止まるものではあるまい。普遍主義的な立場にもとづいた東アジアの地域的な協力が、もっと深かめられていくべき理由はここにある。

同様に、日本平和憲法の起源を探ることは、日本が世界の平和に貢献しつつ普遍主義の世界に進んでいく道でもある。日文研における日本文化の研究は、かかる方式をもって日本の普遍性を見出し、日本が世界の平和と繁栄に寄与できる道を模索しなければならない。そのような努力こそが、日本が「ジャラバゴス」にならない道、そして「孤立した楽園」への転落を防ぐ堂々たる道でもあるはずだ。

(漢陽大学教授／元日文研外国人研究員)